

ローマ人への手紙13章11節 「時を知る」

1A 今の時

1B 時を知る

2B いくつもの徴

2A 眠りから覚める時刻

1B 眠る弟子たちのつまずき

2B 用意している者たち

3B 漂流する信仰

3A もっと近づいている救い

1B 主の到来による救い

1C 今の世からの救い

2C 栄光に変えられる時

2B 千年は一日

1C あきらめない訴え

2C 主の忍耐

本文

ローマ人への手紙 13 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びはローマ 12 章まで来ましたが、午後礼拝に 13 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、11 節に注目します。「**さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いがかっと私たちに近づいているのですから。**」

1A 今の時

1B 時を知る

パウロが、今がどのような時であるかを知っています、と、「時」について述べています。ローマ人への手紙において、12 章から彼は、キリスト者として何をしなければいけないか、その実践を話していますが、13 章では上の権威に従うこと。隣人を愛することを話しています。それと同じように、キリスト者は、「時を知る」ことが求められているのです。

一つ、覚えていただきたいギリシア語があります。私たちが「時」というと、時計で見ることのできる「時刻」とか、物理的な時間のことを思ってしまうでしょう。いつも、時間通りに、予定にしたがって動くことは、とても大切です。けれども、ギリシア語では「時」と「時間」は違う言葉が使われています。時間には、「クロノス」という言葉がありまして、英語のできる方なら chronology という、「出来事の時間的な順番」を示す単語があり、その元になっているのがクロノスです。

けれども、もう一つのギリシア語がありまして、聖書ではこちらが頻繁に使われています。「カイロス(καιρός)」です。これは「何かをする良い機会」という意味です。例えば、「収穫の時」というのは、時間では分かりませんね。農夫の人たちが、良い実りになった、今こそが収穫の時だ、良い機会だ、ということです。これは、いろいろな状況を見て、徴を見て、いつも期待して、用意しています。そして、注意して見ている、与えられた機会を決して見逃さないという意味での「時」です。

そして、このカイロスはとても主観的なので、私たちはその時が与えられると、時間を忘れてしまいます。何時間経っても、1-2分しか経っていなかったような錯覚を受けますね。あるいは、とても大きな試練であれば、それが1-2時間でも何日もかかったかのような思いになります。小学生の時の時間の流れと、今の皆さんの時間の流れは圧倒的に違いますね。それは主観的な時であり、カイロスです。

私たちは時を知るのに、この大事な出来事が重ね合わさって時を知ることが多いのです。例えば、「戦後の歴史」と言ったら、4年近く続いた太平洋戦争なのですが、76年経った今も、原爆投下を記念して、記憶に刻みます。「出来事」で時を見るのです。ですから、今のイスラエルの人たちが、「この土地は、神が先祖に与えられた土地なのだ」といって、アブラハム、イサク、ヤコブが住んでいるところにユダヤ人の人たちが開拓しているのですが、それは四千年ぐらい前のことなのに、今の自分に重ね合わせているのです。福音書を見てください。まったく、時間的には偏っています。イエス様が十字架に向かうところに半分が割かれています。ヨハネの福音書であれば、13章から引き渡される前夜のことを記しています。これは十字架の時があるからです。人には、物理的な時間だけで生きていない、カイロスという時を知っています。¹

2B いくつもの徴

イエス様は、ユダヤ人指導者に対して、時や徴を知らないとして、叱責されました。「マタ 16:1-3 パリサイ人たちが、イエスを試そうと近づいて来て、天からのしるしを見せてほしいと求めた。2 イエスは彼らに答えられた。「夕方になると、あなたがたは『夕焼けだから晴れる』と言い、3 朝には『朝焼けでどんよりしているから、今日は荒れ模様だ』と言います。空模様を見分けることを知っていながら、時のしるしを見分けることはできないのですか。」メシアが来られた時には、これこれのことが起こるといって徴が数多く預言されていて、それがイエス様にあって実現していつているのに、彼らはそれを知らない、と、咎めておられます。他にも、「不信仰な時代」「姦淫の時代」とか、イエス様は、この時が、この時代こそが、メシアが到来しているのに、その時を見逃していると嘆かれたのです。

では、私たちはどうなのか？パウロは、「さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。」と言っています。これは、再び主が到来する時です。主は、「わたしはまた戻って来る」と

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=9198>

約束されていました。そのような時なのを、あなたがたは知っていますと言っています。世において起こっている出来事、教会の世界で起こっている出来事を見ていき、確かに主が間もなく戻って来られる時なのだとすることを知らないということは、キリスト者としてふさわしくありません。

パウロは、テサロニケ人への手紙第二で、同じようなことを言っています。「Ⅱテサ 2:3-7 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。5 私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことをよく話していたのを覚えていませんか。6 不法の者がその定められた時に現れるようにと、今はその者を引き止めているものがあることを、あなたがたは知っています。7 不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。」不法の者とは、反キリストのことです。ダニエルが預言した、荒らす忌まわしい者であり、終わりの日に、キリストが再臨される直前に世界を荒らす王であります。彼が現れることについて、テサロニケの人たちに、よく話していたということなのです。テサロニケの人たちは、信じてそう間もない時にパウロからそう教えられました。そして、この不法の者の秘密はすでに働いているが、引き止めているものがあることを、あなたがたは「知っている」とパウロは言っています。不法の者が現れようとしているけれども、それを抑えるものがいて、せめぎ合いのところにある、ということです。

2A 眠りから覚める時刻

そこでパウロは、「あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。」と言っています。眠りから覚めるとは、どういうことでしょうか？

1B 眠る弟子たちのつまずき

このことを知るために、イエス様が弟子に言われた言葉を思い出したいと思います。ゲッセマネの園で、ペテロとヨハネとヤコブが、イエス様のそばで祈っていましたが、眠ってしまいました。そこでイエス様が言われました。「マタ 26:41 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」これは、ただ肉体的に眠ってしまったということではなく、霊的に眠っていたことを示しています。イエス様は、ご自分が飲まなければいけない杯を、御父の願われるままにしてくださいと祈られて、覚悟を決めておられました。これから捕らえられ、訴えられ、罪に定められ、辱めを受けられます。そして、総督ピラトによって十字架刑に定められ、鞭うたれ、十字架上の苦しみを受けられます。このことについて、全く理解がなく、自分自身がつまずく道に向かってしまったのです。

つまり、眠っているとは、今、自分の置かれている霊的な状況、神から見た状況が分かっていないこと。そして、イエス様と同じように、祈って、すべてを明け渡して、ただ神のみこころのままに生

きることを決めていない状況です。そして、ペテロが自分の肉でイエス様を守ろうとして、剣をふるいましたが、御霊により頼むのではなく、肉の力により頼みました。このようにして、結局、主ご自身を否定することを言うてしまうのです。これが、眠っていることを意味しています。自分の置かれている霊的な状況が分かっていないことが一つ目。祈って、みこころにゆだねていないことが二点目。そして、御霊ではなく、肉の力によりたのむことが三点目です。そして結果は、主ご自身を否定することです。

2B 用意している者たち

だから、目を覚ましていないといけません。実際に試練や誘惑が来る前に、用意していないといけません。ここで思い出していただきたいのは、イエス様が語られた十人の娘たちのことです。主が戻ってこられることについて、

マタ 25:1-13 そこで、天の御国は、それぞれともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘にたとえることができます。2 そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持って来ていなかった。4 賢い娘たちは自分のともしびと一緒に、入れ物に油を入れて持っていた。5 花婿が来るのが遅くなったので、娘たちはみな眠くなり寝入ってしまった。6 ところが夜中になって、『さあ、花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。7 そこで娘たちはみな起きて、自分のともしびを整えた。8 愚かな娘たちは賢い娘たちに言った。『私たちのともしびが消えそうなので、あなたがたの油を分けてください。』9 しかし、賢い娘たちは答えた。『いいえ、分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って自分の分を買ってください。』10 そこで娘たちが買いに行くと、その間に花婿が来た。用意ができていた娘たちは彼と一緒に婚礼の祝宴に入り、戸が閉じられた。11 その後で残りの娘たちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。12 しかし、主人は答えた。『まことに、あなたがたに言います。私はあなたがたを知りません。』13 ですから、目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。

ここで、賢い娘と愚かの娘の何が違うのでしょうか？どちらも眠ってしまったのです。違いは、花婿が来ることを見越して、油を前もって買っておいとか、置かなかっただけの違いです。つまり、「必ず来ることに、前もって用意しているかどうか？」なのです。何かが起こってから、その時に行動しても、その時は遅いのです。何も起こっていない時、その時に用意して、初めて実際に事が起こった時に、すぐに対応できます。目を覚ましているとは、そういうことです。主が戻って来られる。そして、主が来られる日が近づいている時に、いろいろな試練があります。誘惑があります。ですから、前もって、まだ試練や誘惑が来る前に、それが来ることを知って、しっかりと用意していなければいけません。

私たちの教会で、以前、カルバリーチャペル西東京と共に、キリスト教の葬儀社の方をお招きして、キリスト者の葬儀セミナーをしていただきました。キリスト者が仏式の葬儀に行かなければい

けない時に、どう対応するのか？偶像礼拝を避け、かつキリスト者として遺族を慰める証しを、どのように立てるのか？彼は、ご自身の息子さんが野球チームに入っていることを話しながら、「普段からの素振りが大事なのです。」と言いました。つまり、日々の生活で、教会で、目の前にある都合に振り回されることなく、それでイエス様を主とし、神の国と神の義を第一にして、思い煩わないうで生きているのかどうか？ということです。人々のしている方向に、自分もただ任せているだけならば、仏式の葬儀の時に、当然、全員がしていることを自分もすることになります。素振り、ということ。つまり、本番が来る前に、何も無い時に十分に鍛えているのが大事なのです。

多くの人が、迫害が来たら、自分は大丈夫なのか？と心配します。心配するに及びません。自ら、迫害が来ないように、妥協して、忖度して信仰による行動を取らないようにしますから、迫害は来ませんね。この世に調子を合わせてはいけない、と私たちは前回教わりましたが、そのままこの世に調子を合わせるだけに終わることでしょう。今から、思いを新たにして、神のみこころを見分けていく生活をしてから、迫害のことは考えればよいです。塩味がないキリスト者は、迫害を受けません。敬虔に生きようとする者だけが、迫害を受けます。

3B 漂流する信仰

ペテロが眠っているうちに、自分が霊的に危険な状況にいることを、自分自身が知りませんでした。信仰とは、漂流してしてしまうものであることを知る必要があります。「ヘブル 2:1 こういうわけで、私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留め、押し流されないようにしなければなりません。」ここの「押し流される」というのが、まさに漂流です。つまり、海で遊んでいるうちに、いつの間にか沖に流されてしまうことです。自分の知らないうちに、戻れなくなってしまうことです。ヘブル人、つまりユダヤ人のキリスト者は、迫害があったので、そのままユダヤ教の共同体に入ったまま生きて、イエスご自身の証しを立てませんでした。キリスト者として集まると、迫害を受けることが分かったので、忖度して、そのことは隠して、他のユダヤ人といっしょに生きるようになっていたのです。それも、いつの間にかです。少しずつ、集まりに出てくることをやめました。

そこで、ヘブル書には、こうも書いてあります。「3:12-14 兄弟たち。あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。13 「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なににならないようにしなさい。14 私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」不信仰な悪い思いが出てきてしまうことを、気を付けるのです。そのためには、「今日」と言われている間、つまり、日々を大事にして励まし合うのです。最初の確信、つまり、イエス様を主として受け入れたその確信を、終わりまでしっかりと保つことは、実は大きな冒険でさえあります。「天路歷程」に出てくるような、天のエルサレムに向かうまでの旅です。いろいろな試練と惑わしがありますが、そこには兄弟たちの励ましがあって、それで主人公は天のエルサレムで、イエス様に会うことができます。

3A もっと近づいている救い

そしてパウロは、「**私たちが信じたときよりも、今は救いをもっと私たちに近づいているのですから。**」と言っています。救いが、信じた時よりも、もっと近づいているというのは、当たり前といえばそうです。父なる神が人の子の到来を定めておられ、その日が信じた頃よりは近づいているのは、そのとおりなのです。けれども、私たちの思い、心情として、こういった傾向があります。いわゆる、「熱しやすく、冷めやすい」のです。信じた時には、イエス様が来られることを熱心に待ち望んでいたかもしれませんが。けれども、いつもと変わらない生活で、戻って来られるような兆しもない。だから、主はご自分の到来を遅らせているのだ、と勝手に決めつけて、元の生活に戻ってしまうことです。イエス様は、主人の帰りが遅いからといって、自分の下役たちを打ち叩いているしもべについて語られています(マタイ 24:45-50)。遅いと思っているのが間違いで、逆に近づいているのです。遅いように見えるだけで、実は近づいているのだということです。

1B 主の到来による救い

1C 今の世からの救い

ここで言われている「救い」とは、何でしょうか？二つの意味がありますが、一つは、「今の世からの救い」です。「ガラ 1:4 キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。私たちの父である神のみこころにしたがったのです。」今の悪の時代から救い出すとは、主が戻ってこられて、私たちをこの地上から取り去れる時、天に引き上げられる時のことを話しています。かつて、エノクが主と共に地上を歩んでいましたが、主が取り去られました。その後でノアの時代に、洪水の裁きがありました。ロトがいましたが、ロトとその家族がソドムを出ていくまでは、主は火による裁きを下すことはありませんでした。彼らを引き出して、それから裁かれました。同じように、主は、今の悪い時代から私たちを救い出して、それから地上に災いを下されます。

2C 栄光に変えられる時

そして、もう一つは、「救いの完成」です。私たちは、主イエス・キリストの血によって救われました。来る神の怒りから救われています。けれども、それは将来に起こることです。救いは確かですが、その完成は将来を待ちます。その時に、まだ罪を宿しているこの体も、栄光の姿に変えられ、主に似た者になります。「ピリ 3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」天から来られるイエス様とお会いし、栄光の姿に変えられる日が近づいているのだから、欲によって地上のことだけを考えるようにしてはいけないという戒めです。

2B 千年は一日

ここで、改めて「時」を考えたいと思います。「時が近づいている」と、黙示録 1 章 3 節にもありま

す。けれども、いつまでたっても、主が来られないではないか？ そういつてから、もう二千年経つではないか？ とされるかもしれません。けれども、また思い出してください、ここでの「時」は、クロノスではない、カイロスなのです。二千年間、主がいつ来てもおかしくない時だったのです。主がよみがえられ、天に昇られ、神の右に着かれた時から、いつ何時、戻って来られるか分からないのです。ですから、私たちはいつでも、黙示録の最後、聖霊と花嫁が、「主よ、来てください。」と慕い求める、その願いを抱いているべきです。

1C あきらめない訴え

主はあきらめないで祈りなさい、と命じられました。必ず、訴えは聞いてくださることを、不正の裁判官の喩えで語られました。「ルカ 18:6-8 主は言われた。「不正な裁判官が言っていることを聞きなさい。7 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」」

主がすぐにでも来られる、そして正しく裁いてくださるということを信じて祈っていたのに、すぐに来ないと早合点して、その希望を捨ててしまうという、ことです。主は、「だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」と言われます。そこまで、人々が希望を捨ててしまうということを仰っています。私たちは、忍耐して、主の来られるのを待ち望むべきですね。

2C 主の忍耐

なぜなら、その「時」は、時間ではないことを覚えるべきなのです。私たちは、主が来られ、再び来られる間に生かされており、その時は二千年がたって、瞬く間に過ぎ去ってしまうほどの希望があるのです。ペテロ第二 3 章には、「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」とあります(8 節)。二千年も経っている、のではなく、たった二日しか経っていないような感覚になるのです。それだけ、主が戻ってこられる希望は大きく、私たちキリスト教会が、時間的に二千年待っても、色あせることなく、あきることなく、わくわくさせるものなのです。

先ほど、私たちが忍耐して待つて行かないといけないと話しましたが、実は、主ご自身が忍耐しておられて、それで主の来られるのが、遅くなっているように感じています。「Ⅱペテ 3:9 主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」主が、悔い改めるのを待つておられて、それで忍耐しておられます。

主は、忍耐深くあらられる方です。私はしばしば、忍耐がないと思う時があります。2008 年に、イスラエル旅行に行った時に、エジプトのほうからイスラエルに入りました。イスラエルのバス会社で、

なんとエジプトのカイロから、イスラエルのエルサレムまでのバス運行をしているところがあって、カイロから乗りました。シナイ半島を横断したのは、圧巻です。それから、エジプトとイスラエルの国境が、紅海の沿岸にあり、エジプトはターバという町で、イスラエルはエイラットという町です。私たちはすぐに越境できました。他のほとんど全てがすぐに越境できました。ところが、2-3 人の人が3時間でしょうか、4時間でしょうか、手続きの不備があったのでしょうか、時間がかかったのです。私なんか、「置いていって、私たちだけで行こうよ。」という思いが、一瞬、よぎりました。それは、ひどい考えですね、だって、その人たちが越境したら、エルサレムまで自力でいかなければいけません。

神は、そんな方でないことを感謝します。まだ悔い改めていない人が残されていて、私のように、「彼は置いておこう」なんていうことはしない方です。悔い改めるのを忍耐して待っておられて、それで主の来られるのが遅いように感じるのではないかと、思います。また私たちが悔い改めるのを待っておられるかもしれません！眠ったままではなく、眠りから覚めるのを待っておられるのかもしれません！主の忍耐こそが、救いなのです。